研究ノート

合衆国北部大都市における黒人英語の研究成果
― 方言学の新視角 ―

岡　田　　妙

0．0．　1960年代の方言学と黒人英語
　0．1．　方言学とアメリカ合衆国
1．0．　言語地理的平面と時間軸
　1．1．　黒人英語とアフリカ
　1．2．　米国の黒人歴史と黒人英語
2．0．　社会的方言としての黒人英語
　2．1．　文体的変種
　2．2．　聞き手の反応と評価
　2．3．　性別と年令による相違
　2．4．　社会的地位による相違
　2．5．　社会的方言の成立要因
3．0．　社会的方言の言語的基盤
4．0．　社会的方言の言語文化的基盤
5．0．　黒人英語と国語教育

0．0．　黒人英語というのは居住地や出身地の別なく一般に黒人によって話される英語(1)　という風に解することもできるが，ここでの対象は，アメリカ合衆国の黒人英語に限っておきたい。

合衆国における黒人英語の言語学的研究は1960年代に本格化し，躍進した。1960年代の言語学といえば，理論面では変形生成文法の出現によって1950年代とは大きく違った思潮の育った時であったが，黒人英語の研究というのは，こうした理論面よりむしろ現地踏査的な方言学の流れに沿ったものである。(2)

1950年代以前に方言といえば誰しも地域方言のことを考えた。(3)　だから集められた方言資料も「どの地域にどのような英語が話されているか」という疑問に答えるような種類のものであった。もっとも実際に資料収集に参加した研究者たちは，具体的に各地で，どの特定個人の方言を採録するかを決めねばならず，技術的な必要に迫られて，ある程度地域という第一要因以外にも言語内に変化をもたらす他の要因を考慮せざるを得なかった。そこで各地に三種類の話者があると考え，第一類話者（ほとんど正式の教育を受けなかった者），第二類話者（中等学校教育を受けた者），第

(1)　例えばアフリカ人の英語問題については Spencer (1971) ――以下，言及文献の詳細については末尾のリストを参照のこと――に九編の論文が集められていて，一般に黒人英語の持っている問題の多様さがうかがわれる。

(2)　理論言語学は Chomsky (1965) の言を借りれば "Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech-community." (p. 3) という立場に立つのに対し，方言学は一言語共同体の内部に変種があることを前提として，変種のあり方を追究するわけである。後にもふれる通り（注46参照），黒人英語の分析は変形生成文法理論の影響を強く受けた面もあるので，言語理論と方言学的方法とは決して無関係というわけではない。

(3)　合衆国方言学の基礎は Kurath (1949) によって築かれたとされているが，この大規模な研究は Kurath, *et al.* (1939) をはじめとする中間報告によって刊行前から多大の影響力を持ち，方言に関しては長年の間ほとんど唯一の事業であった。それは Mencken (1936) の著名な書に代わるものと期待され，また1930年以降の構造主義言語学の基礎概念をふまえた二十世紀的方言学の一成果でもある。この基礎資料をもとにした方言学的解釈の分野では

三類話者(高等教育を受けたことのある者)とした。[4] そしてそれぞれの教育程度の個人から方言資料を得たのである。

そこで言語に特徴を添えるものとして地域の他に学校教育という第二要因だけで十分なのか，という当然な疑問が起こり，そして地域方言が社会や文化の中で生きて使われる実態をもっとよく知るための模索が始った。[5] 話し手の話し振りを記録するだけであった方言調査から，聞き手の各種方言に対する価値観をも記録しようという所まで調査範囲も拡大し（2．2．参照），それに伴って必然的に方言に対する価値判断や特定方言を話す個人に対する評価など，1950年代の言語学的不干渉論[3]とは大いに違った見解に立つ資料も現われはじめた。以前は国語教育の問題に介入しようとしなかった方言学が，1960年代には積極的な提言をしはじめた(5．0．参照)。また人種や特定民族集団の方言様式について明言しようとしなかった1950年代とはちがって，民族集団に対してもはばからぬ言及をするようになった。[6] 地域差に対する関心から，都市と遠隔地を「平等に」扱ってきた従前の方言学[7] に対して，近年の研究は都市の複雑さに注意を集中するようになった。このような全般的な言語学的思潮が黒人英語という課題を研究し易くもしたし，また黒人英語の研究の進展がこのような思潮を助長もした。そうした中で Allen, Gary 共編の *Readings in American Dialectology* が現われた。そこに収録された41編の論文中，5編は真正面から黒人英語を取り上げたもので，他にも黒人を含めた民族集団の言語生活を扱った報告が含まれている。このことは1970年代の方言学の出発点を象徴していると考えられる。

Atwood (1953) がよき先例とされている。

これら方言研究は一つの言語観をもたらした。それは言語学的相対論というか，不干渉論というか，言語には人為の介入が困難だという見方であった。そのような見解を最もよく代弁した Hall (1950) の最終段落には "…. the message that linguistics has for our society at present is primarily this: Don't Meddle Ignorantly with Your Language! Any meddling with our language, by ourselves or others, in the name of "correctness," of spelling, or of nationalism, is harmful." (p.259) と述べられている。この種の見解に従えば方言についても，同一言語といえども地域差があるのだということを認識するだけでよいとされがちであった。合衆国は南部，北部，中部 (Midland) の三大方言地域に分けられ，それぞれの地域で好ましいとされている「教養人的」英語は「いずれ劣らぬ」標準語であって，どの地域訛りも等しく受容されるべきもの (acceptable) とされた。

(4) Kurath, *et al.* (1939), p.44. 教育程度による話者の分類の他に，A類（老年または古めかしい話し振りの者）とB類（中年ないし若年，または現代風な話し振りの者）という区別を一応設けてはいるが，これについては話者リストにA，Bの区別が記されている以外には何の考察も加えられていない。

(5) Hymes (1964) はこのような要求に応えた最初の書物であった。

(6) 例えば Kurath (1949) は "By and large the Southern Negro speaks the language of the white man of his locality or area and of his level of education. …. As far as the speech of uneducated Negroes is concerned, it differs little from that of the illiterate white; that is, it exhibits the same regional and local variations as that of the simple white folk." (p.6) と述べて黒人英語の存在を否定している。ただし南カロライナとジョージアの低地には，Gullah と呼ばれる黒人特有の方言があるとしているが，これは Turner (1949) がすでにあったためである。1960年代の黒人英語の研究には，もはや黒人英語が各地域の他の社会集団と全く同一方言であるという前提に立つものはない。南部においても黒人英語は他の集団の南部方言とはちがっているとする意見がある：(Bailey 1965)。

(7) "In selecting the communities, consideration was given to the original settlements, as well as to later shifts in population. …. Some attention was paid also to evenness of distribution, so that there might be no serious gaps …. We feel rather confident that *the Atlas has not overlooked any provincial center of importance and that rural as well as urban types of communities are well represented.*" (Underline added.) Kurath, *et al.* (1939), p. 39.

0.1. 方言学というのは本来は地域による一言語内の変種を調べるものである。しかし現在では地域的方言の他に非地域的方言または社会的方言[8] と呼ばれるものの概念が確立している。そうしてこの社会的方言が，アメリカ社会という民族・文化・言語・デモグラフイなど，どの点からみても複雑な社会——それも北部の大都市，デトロイト，シカゴ，ニューヨーク——を対象に進展してきたことは誠に興味深い。

1.0. ヨーロッパにはじまった方言学は，地域的方言を調べることによって，言語の基層と上層という概念を生んだ。[9] 例えば Gilliéron が20世紀はじめに発表した「密蜂」や「牡馬」を意味する各地方の語彙の考察[10] のように，平面上に横たわる方言区画をもとにして，方言学はそれといわば垂直に交わる時間軸を発見し，地層のように重なった言語の層の概念を作り出したのである。つまり方言学の興味は，より古い時代の語彙・語形を言語地図という平面の中から探り出すことにあった。[11]

ところでこの時間軸的概念が，米合衆国ではどんな形を取り得たであろうか。それは各地の居住者が，かつてはどの地から移住して来た集団であるかという所へ発展せざるを得ず，このことは各民族集団の，出身国の言語（これは文字通り世界中にまたがっている）にまで逆上って調べることを意味し，各出身国における方言区域や米国移住後に交わった地域的・社会的集団との交流を考えることを意味した。[12] 黒人の場合には，問題となるのは西アフリカの諸言語であり，移民後の主たる居住地，合衆国南部の白人英語であり，そして黒人英語の調査時点における北部大都市での生活諸条件である。

古典的方言研究における地域的方言と歴史的時間軸との結びつきは，黒人英語において規模や質の変化を来たさざるを得なかった。

1.1. 黒人英語と西アフリカ諸言語との間には結びつきがあるのか，あるとすれば，どんな関係にあるのか。これについてはまだ言語学的な実証は不十分である。[13] しかも黒人英語の特徴は，少なくとも部分的には，西アフリカ諸言語から来たものだとする意見が根強く存在する。

言語学的実証が困難なのは，一つには個々の黒人話し手（言語学ではインフォーマントつまり言語資料提供者という）について，出身地が明確でないためで，他の地からの移民達のように出身地方を言い伝えている場合とは条件が違っているからである。[14] 一方西アフリカの言語事情も，これまた複雑で，少数言語部族が多く，言語間の相違もあって，実証的な研究がはばまれ易い条件にある。

しかもなお，黒人英語が西アフリカ言語の影響を含んでいるとする説があるのは，黒人の保有する他の文化面——信仰や祭礼のあり方，食生活，音楽，舞踏，口誦の物語り，家族形態など——にアフリカ的特徴が残っているとされるからである。[15] 文化人類学的な実証に較べると，たしかに言語面でのアフロ・アメリカ研究は立ち遅れている。

---

(8) Bloomfield (1933), p. 47には "....the differences of speech within a speech-community are *local*-due to mere geographic separation —and *non-local*, or as we usually say, *social*." と見えており，社会的階層と言語行動の相違にふれているが，社会的方言について，資料をもとにした本格的な議論がなされるようになったのは，やはり近年のことである。

(9) 「基層」の定義の一例を挙げるなら，「一つの言語または言語的まとまりにもう一つの言語が置きかわったばあい，前者を…基層語（シュブストラ）と呼ぶ。」コエン (1956), p. 82. 後者つまり置きかわる方を上層語（シュペルストラ）という（同書 p.109参照）。

(10) ドーザ(1958), pp. 34ff.

(11) 日本の方言研究にも同じ関心と手法とが見られるが，これについては柴田 (1969) に詳しい。

(12) この種の研究の最もよい先例は Haugen (1969) である。

(13) 方言学的に認められた言語資料は上記の Turner (1949) 唯一つである。他には Long (1969) と合衆国内の黒人英語についてではないが Taylor (1961) がある。

(14) アメリカの黒人とアフリカ人とのつながりを人類学的に探求した Herskovits (1928) の書物があるが，このような研究があること自体，新大陸の黒人のおかれた情況の特異性を物語る。

(15) 黒人文化の汎アメリカ的研究の中で Herskovits (1941) は文化人類学の立場からアフリカ的特徴を指摘している。その第八章には言語と言語に密接な

1.2. 米国へ移住してから後に黒人の吸収した英語はどのようなものであったか。この点についても言語資料は明きらかでない。黒人には，稀な例外を除いては，積極的には英語を教えなかったのではなかろうか，とか黒人に話し掛ける場合の英語は短い命令文や，前置詞・冠詞などのいわゆる機能語を省略した「簡単な」英語でしかなかったのではなかろうか，[16] というような考察はあるが，いずれにしても確実な言語資料らしきものにはまだ出会わない。

1960年代に研究対象となった，北部大都市における黒人英語[17] は，南部各地の訛りが入りまじって，北部黒人に特有な一つの「方言」をなしていると考えられている。[18] もしそれが正しいなら，黒人英語は地域的方言ではなく，黒人という民族集団に属する社会的方言なのだということになる。しかし黒人英語にはもはや全く地域差がないのであろうか。これについては，現在の資料が北部大都市のものに限られていて，鍵を握っている南部の基礎資料がまだ不十分なため確答ができない。[19]

2.0. 地域的方言であれ社会的方言であれ，方言学的研究の基礎は資料収集にある。これは無論テープレコーダーという簡便な録音手段の出現に負う所大きいが，本質的な方言学的方法上の問題は依然として残っている。

2.1. 一般に発話というものは，話し相手や場所柄などの状況によって同一人物の場合でも相当に変化する。黒人は白人に対して，政府事業の調査官に対して，仲間の黒人に対して，それぞれどのような話し方をするのか。これを今仮に文体的変種と呼ぶなら，それはどのようにして収録するべきか，また文体的変種の変化幅はどれくらいであろうか。特に社会的方言を扱うに際しては，従来のような単語リストや短文を読み上げる方法や，事物を指し示して語彙を調べる方法だけでは不十分である。従って大がかりな黒人英語調査では，個別面接の他に集団面接を取り入れるなど，仲間同志のやりとりを記録する工夫が必ずなされている。

かかわりのある芸術分野とが扱われている。また死後出版された Herskovits (1966) にも関連の論文がある。

(16) Walker (1968), p. 3にはルイジアナ州における過去の教育上の機会不均等に言及がある他，" Few slave owners were concerned with teaching the niceties of the language to the Negro. The first English that was taught to him, usually by overseers, was a pidgin which was a grossly oversimplified version of the master's language." (p. 26) と書いて，これは Taylor (1961) と同意見であるとしている。

なお，この奴隷時代のいわば卑小化した英語が今日の黒人英語に残留しているとする見解については Stewart (1967), Stewart (1968) 参照。

(17) デトロイトについては Shuy (1967a,b), Shuy (1968), Wolfram(1969a), Wolfram(1969b); シカゴについては McDavid and Austin (1966), Pederson (1964), Pederson (1971); ニューヨークについては Labov, *et al.* (1968), Vol. I にそれぞれの方言資料の分析と記述がある。ワシントン市における調査には大がかりなものはないが，Loflin (1966)と Baratz and Povich (1968)とはいずれもワシントン市での採集資料をもとにしたものである。

(18) Labov, *et al.*(1968), 1.1.2. ではロサンジェルスを拠点とするテクサスやアーカンソー出身の黒人英語や，ノース・カロライナで収録した資料などにもふれ，他の研究者の北部都市の資料とあわせて考察した場合，南部方言の融合が北部都市に存在すると考えてよいとされている。また Loflin (1966), p. 2, fn.3には "…in comparing ULS〔i.e., Urban Language Study〕 results with the results available from William Labov's project in New York City and Raven I. McDavid's project in Chicago it is apparent that there is a variety of Non-standard English spoken by large numbers of urban Negroes. That is, in spite of the fact the speakers of this variety are widely separated in space their language displays a remarkable sameness of structure." と述べられている。

(19) 南部における黒人英語の研究も無論ないわけではない。特に基礎的記述の多いのは Williamson(1968) であるが，他にも Long (1969), Houston (1968) があり，また Nelson W. Francis, *et al.* のミシシッピー州 Tougaloo を中心とする研究プロジェクトもある (The Clearinghouse for Social Dialect Studies (1966), p. 20).

結論的にいうなら，現在の資料では黒人英語にも相当な変化幅があること，また変化幅があるにもかかわらず，黒人英語はやはり社会階層的方言であるということである[20]（2．4．参照）。

2．2．社会的方言の調査にとって，もう一つ重要なことは，様々な話し振りがどのような社会的評価を受けるかということである。旧来の方言学はこの点についての資料は集めなかった。[21] 地域方言とその時間軸に注意が集中している場合，聞き手の反応は問題にならなかった。しかし黒人英語が生きた社会的方言であるなら，社会がその方言をどう受け止めているかが当然研究対象となる。ここでもテープレコーダーの役割は大きい。黒人をも含めた様々な人の声を再生して，聞き手の判断を試すことができるからである。録音された話し手が「よい」英語を話しているか，この話し手の所属する民族集団や社会的・職業的な地位はどのようなものと考えられるか，などの質問についての回答が，方言資料の重要な一部を占めるようになったのは，1960年以降の方言学の特徴である。

黒人英語について現段階でいえることは，(1)社会的地位の判断や「よい英語」に対する認識には，聞き手の反応に相当の一致がみられること，(2)民族集団への帰属に関する判断には，ばらつきが多いこと，の二点である。つまり黒人でない話し手の英語がしばしば黒人の発話だと判断される。この点では聞き手が黒人であるかないかによる有意な差はないとされている。だからこの観点からは，黒人だけの英語が存在すると主張するに足る確たる根拠はないのである。[22] 従って黒人英語の存在は，あらかじめこれが黒人による発話だとわかっているものを事後分析した場合に，その分析結果が一致しているという点——例えば，どの黒人も二重母音を発声しないとか，*be* 動詞の普遍時制形として *be* を用いるとか[23]——にしかその拠り所はない。しかも黒人以外にも同じ方言的特徴をもった発話をする集団があって，黒人英語の特徴を全部は持っていないにもかかわらず，聞き手の立場からは黒人英語と同一視されてしまう，という風に解釈することができる（2．4．参照）。

このことは文学作品などに現われた，いわゆる「黒人的英語」と無関係ではないように私には思われる。一般に作家の作り出した「黒人的英語」は実際の黒人英語の特徴をいくつか取り上げて，それらの特徴が現実には一個人の発話中3～4割程度にしか現われないものを，100％近くに誇張して用いるのだ，といわれている。[24] これについても，もっと綿密な調査が必要ではあるが，もしこれが正しいとすれば，作家の誇張は一般に聞き手に内在する誇張的な聞き取りの傾向を反映しているのかもしれない。

2．3．黒人英語の研究が最もよく実証したことは，社会的要因と言語活動上の特徴との相関が成立するということである。[25] 録音を聞けば声だけでわかる年令や性別などは聞き手の反応を調べるまでもないが，それらを正確に記述することはそう容易なことではない。

性別による言語特徴は英語に関する限りは近年まで言語学者の注目をあまり惹かなかったもののようである。黒人英語の場合，男女間の言語行動上の相異は生活信条や希求のちがいに劣らないということが明きらかになりつつある。[26] 黒人の場合も男女は異った社会的役割を果しており，そのことが必然的に言語行動に現われるのであろう。[27]

---

(20) Labov (1969), pp. 17ff.

(21) この点では Hymes (1964) の書物もやはり発話側が中心であった。一方，聞き手側に注意を向けた研究が1960年以前に皆無だったわけでもない。Bryden (1968), pp. 109ff. のリストによれば1934年に一編，1952年に一編の論文が発表されており，いずれも黒人の発話が問題にされている。

(22) Labov, *et al.*, 1.1.0. ただし Bryden (1968) の資料だけは聞き手の「人種判断」は80.12％から87.24％という的中率の高さを示しているが，ここでも聞き手が黒人である場合とそうでない場合との間に有意な差はないとしている（pp. 67ff.）。

(23) 二重母音の欠除と be 動詞の用法とは黒人英語の中で特に大きな特徴である。黒人英語と標準英語の比較については〔注46〕を参照。

(24) 例えば Long (1969).

(25) 特に Shuy (1968); Labov, *et al.* (1968).

(26) Shuy (1969); Labov (1969), esp. pp. 29ff.

(27) 黒人文化を調査したスエーデンの文化人類学者 Ulf Hannerz は，黒人社会における男子と女子の役割の相違点を指摘し，これが言語生活と密接に関係していることについて述べている。Hannerz (1969), esp. pp. 70ff.

年令上の相違も，思春期以前，思春期，成人期という大ざっぱな分け方ではあるが方言と何らかの関係にあるものとして調査の対象にされるようになって来た。[28]

これら二つの要因は，文体的変種が母国語習得のどの段階でどのような形で出現するのか，どのような状況のもとに発達するのかなど将来の国語教育（5.0.参照）ともかかわりのある問題点を含んでいる。[29]

2.4. しかし何よりも強く，当面の関心を惹いているのは，社会的方言と社会的地位との関係である。黒人英語に関連した社会的方言研究では，一般に社会的地位の指標として次の四点，中でも初めの三点がよく用いられている：(1)教育程度，(2)職業の種類，(3)収入（収入額を用いる場合，収入の形——日給，週給，年棒，謝礼，手当，等々——を用いる場合，両者のかね合いによる場合など様々である），(4)居住地区（honsiug）の四点である。[30]

このような考慮の上でできた社会的地位の指数または類型と方言特徴の区分とは，現在の資料に見る限り，驚く程よく一致している。特にデトロイトとニューヨークの資料では，正に「言語特徴の分かれ目は階層の分かれ目である。」[31]

それでは黒人英語は，黒人と同等の社会的地位にある他の民族集団の英語とどのような関係にあるのか。現在の資料では，それは質的な違いというよりむしろ量的な違いとしか思えない。つまり年令・職業・収入などの大体等しい集団を対象とした資料は，他の民族集団のもつ英語の特徴を，黒人英語がより多量にもっていることを示している（2.2.参照）[32]

2.5. そこで社会的方言を特徴づける要因は(1)社会的地位，(2)年令，(3)性別，(4)民族集団，の四つに大別され，中でも(1)の社会的地位と言語特徴との間に最も明確な関連が立証されている，ということになる。そしてこの点では，話し手側の資料分析と，聞き手側の判断（2.2.）とが最もよく一致している。

3.0. 言語的特徴が，個人により，話し相手により，話の行われる状況・内容等によって変化するのは，言語構造上の一体どの部分においてであろうか。音声構造にも，文法構造にも，語彙の用い方にも，話し手の個性や立場を表現できる言語的自由の範囲があるはずだ。このことについて，言語構造上の分析を試みることは，社会的方言のよって立つ言語構造的基盤を見極めることになる。

Shuy はデトロイトでの研究を通じて，言語には「意識の部分と無意識の部分」[33] とがあるということを言い，意識の部分が文体的変種の基盤であるとした。また Labov らはニューヨーク市での収録資料から「許される部分と許されない部分」[34] という区別を用いている。これらの考え方が今後のより詳細な文体的変種の限境規定への手がかりになるものと思われる。

4.0. すでに述べた通り，方言研究は黒人英語という主題と取組んだことによって様々の改良を加えられた。中でも大きな改良点は，言語特徴の収録と同時に，生活文化全体を解釈しようとする動きである。[35] 研究対象が黒人であるということも，そのような動きを促がした。なぜ黒人は10年前後の年月を学校に在席し，しかも多大の自己犠牲を強いられながら，なおかつ世代を通じて「機能的文盲」であり得るのか，という Labov の疑問[36] は，黒人が方言上の特異集団で

---

(28) Shuy (1968), Labov, *et al.* (1968).

(29) Labov (1964), p. 486 では12才頃から文体的変種の存在に気付き始め，15才以降で使い分け始めるとされている。

(30) Shuy (1968) は四点とも考慮，Labov, *et al.* (1968) は居住地区はハーレムに限られているため，その他の三点を考慮している。

(31) "... linguistic structures are social structures." Grimshaw (1968).

(32) Labov, *et al.* (1968), 1.0.2.; Shuy (1968), Part III A.

(33) Shuy (1968), Part IV, pp. 11ff.

(34) 技術的には Labov, *et al.* (1968) は言語運用上の「三種類の規則」というものを設定して，第一類の規則は全く変種の許されない部分，第二類の規則は変種が社会階層などを反映する部分，第三類は自由に変種を作ってよい部分，にそれぞれ対応するとしている。

(35) 生活文化全体を直接扱うことは言語学単独では無論不可能だが，伝統的な方言研究が人文科学的な考察を取り入れてきたのとは，少しちがった意味で，黒人英語の研究は黒人集団を総合的に理解しようとしている。

(36) Labov, *et al.* (1968), p. 1 に「機能的文盲」

あるというだけでは説明がつかない。何かもっと重大な要因がそこにあるのではないか，というのが生活文化全体を観察することへの動機であった。そのような関心に基いた方言資料の中から，黒人集団の持つ特異な言語文化の存在が浮かび上って来たのである。

その一つは即興歌唱で，これは曲も歌詞も即興であるが，しばしば集団で呼応しながら行われ，若年層の集団には必ずその道の「達人」がいてリーダーになる。また即興歌唱の技能は集団内で高く評価されている。

その二は民族説話的，口誦文学的な韻文で従来も採録されてきたが，方言収録に際して多量に集められている。

その三は「慣習的嘲罵」(ritual insults)[37]と呼ばれるかなり遊戯的なことばのやりとりである。典型的には「試合」の相手の女親族，特に母親を話題にしたものが多く，多分に即興的で，相手を言い負かすことの他に聴衆をも含めてことばの扱いを楽しむ反面もある。

最後にこれもやはり口誦文学的な朗誦がある。これは即興のものではなく，前以て知っていなければ相手の問いかけに応ずることのできないもので，これを知っている者は "heavy stuff" を知っていると言われる。独特な音調で最も形式ばった言いまわしを用いた特異な韻文であるが，ハイ・ティーンの連中には容易には習得できないものであることが，収録資料から読みとれる。[38]

これら言語文化的現象は様々な形で日常の言語活動に影響を与えていると考えられる。[39] これらはまた技能や練習を要するもので，黒人は集団の中で互いに技を競ったり，挑んだりするといわれている。無論，競われている技能の評価基準は，国語教育的基準とは違っている。

5.0. 1960年代の黒人英語の研究は，当初から国語教育への関心と無縁ではなかった。そのため，研究対象にも，成人と同様に若年層——学齢期からハイ・ティーンまで——がしばしば選ばれている。[40] またどの研究者も，黒人英語そのものの記述と同時に多かれ少なかれ国語教育の問題に言及している。学齢期の黒人には，いわゆる白人教師的「標準」英語は聞いても十分わからない，というのが研究者の一致した見解である。それは一つには音声構造上の機能的単位である「音素」が教師のそれと黒人児童の会得したものとの間で競合関係にあるからだとされている。[41] 初等教育の第一目標である「読む」能力は，英語正書法の複雑さを除いてもなお，この音声構造上の機能的競合のために当初から芽生える機会を妨げられる。

一方，発表能力の方の「話す」「書く」練習についても「聞く，読む」という受容能力を習得しないままでは成長できない。語彙・文法のくり返し練習だけでは，*kiss* の複数形が *kisses* であるのに *list*（黒人英語では *liss* と発音される）の複数形がなぜ *lisses* でないのかわからないであろう。つまり標準英語の発音や正書法は黒人児童の立場からみるとあまりにも個別的・恣意的にすぎるのだ。[42]

黒人英語には「まちがい」がどれだけあるとか，黒人は英語のどこを「まちがう」かという質問の仕方ではなく，黒人英語にはそれなりの内的に統一した構造があるはずだという前提に立って，その仕組みを解き明かした上で教育問題の解決に当ろうとするのが方言資料に基ずく国語教育議論なのである。しかし黒人英

の説明として次の一文がある："For all practical purposes, a great many of these Negro youth cannot use reading for other learning; they are functionally illiterate in the full sense of the term."

(37) これには様々な名称が黒人間に用いられているようで，論文によって "sounding, signifying, dozens, rhyming, jones" などの用語がみられる。Hannerz (1969), pp. 129ff.

(38) "Rifting" と呼ばれるこの種の朗誦を扱っているのは Labov, *et al.* (1968), 4.2.5. だけである。

(39) Hannerz (1969), esp. Chapter 7.

(40) Dillard (1966) は近年の大都市における言語研究の二大特徴は(1)文章構造の綿密な研究と(2)14才以下の若年層の言語が研究対象になっていることだと述べている（p. 2）。

(41) 例えば黒人英語には，教師の気付かない多数の同音異義語がある。この種の音声構造について書いたものは多いが Labov and Cohen (1967a) が最もよくまとまっている。

(42) だから黒人英語の音声構造によく則したものから選択的に教えてゆこうという提案もある。Stewart (1969), Wolfram and Fasold (1969).

語と国語教育の議論はまだ始ったばかりで，解決の方向というよりむしろ問題の所在が明きらかに見えて来つつある段階である。

例えば日常語（vernacular）しか使わない者に，「第二方言」としての「学校ことば」を使うようにしむけようという議論がある。(43) この種の議論に現われる「方言」というのは，文体的変種の延長線上にある概念のように思われる。言い換えれば文体的変種の振幅をもう少し拡げて学校的基準により近い変種を使いこなせるようにしたい，ということのようである。(44) しかし「第二方言」が文体的変種とは質的に異ったものであれば，「学校ことば」はむしろ第二言語（つまり外国語）としての捕え方をするべきであろう。(45)

黒人英語に対する「学校ことば」は「第二方言」なのか，「第二言語」なのか，という議論は，教育という，話者を対象にした事業にかかわりがあるだけではなく，黒人英語とそれ以外の方言との構造上の比較という理論的な反面があって，これが方言学の関心を今後とも呼び起こしていくことになろう。(46)

黒人英語の研究は，方言学の視野を拡げ，研究技術の上でも，方言理論の上でも，新しい問題と可能性とを生み出した。

（1972年12月）

---

(43) Shuy (1968), Part IV, pp. 18ff.

(44) もしそうならば，個人の文体的変化の幅は，例えば学校教育などによってどのくらい拡張可能なものであろうか。Labov (1964) によれば中流より下流の話者の方が現在すでに文体的振幅が大きいが，これは更に拡張の余地があるのか，それとも「学校ことば」の導入によって日常語の消失が起こるのか。

(45) 表現上は「第二方言」（例えば "bi-dialectal"）という語を用いていても，対照研究を基盤とする教授法などの上で事実上「第二言語」的取扱いを意図した場合もある。またそのような教授法を主張する Golden (n. d.) のような意見もある。

(46) 例えば Loflin (1966), Loflin (1971) では黒人英語の動詞に関する文法規則は深層構造においても標準英語とは違っている，としているのに対し，Chomsky らにはそれとは反対の見解があって (Labov, *et al.* (1968), 1.1.3.), 方言間の比較研究はすでに論戦の的になっている。特に be 動詞の構造には多くの議論がある。総体的な黒人英語と標準英語との比較に関しては Labov and Cohen (1967a), Labov and Cohen (1967b) がある。Wolfram and Fasold (1968) には be 動詞に関しても詳しい文法説明があり，ヨハネ書第三章1－4節の黒人英語訳は以下のようになっていて，be 動詞の（欠除も含めて）用法が特に文法規則の基本的相違を感じさせる："1. It was a man named Nicodemus. He was a leader of the Jews. 2. This man, he come to Jesus in the night and say, Rabbi, we know you a teacher that come from God, cause can't nobody do the things you be doing 'cept God with him. 3. Jesus, he tell him say, This ain't no jive if a man ain't born over again, ain't no way he gonna get to know God.' 4. Then Nicodemus, he ask him, say, How a man gonna be born when he already old? Can't nobody go back inside his mother and get born."

参 照 文 献

Allen, Harold B., and Gary U. Underwood. (1971). Eds. *Readings in American Dialectology*. New York: Appleton-Century-Crofts.

Atwood, Bagby E. (1953). *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Bailey, Beryl Loftman. (1965). "Toward a New Perspective in Negro English Dialectology." *American Speech*, 40, 171-177.

Baratz, Joan C., and Edna Povich.(1968). "Grammatical Construction in the Language of the Negro Preschool Child." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 020 518.

Baratz, Joan C., and Roger W. Shuy. (1969). Eds. *Teaching Black Children to Read*. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.

Berg, Paul Conrad. (1969). "Language Barriers of the Culturally Different." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 029 767.

Bloomfield, Leonard. (1933). *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Broz, James J. "Trends and Implications of Current Research in Dialectology." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 010 690, n.d.

Bryden, James D. (1968). "An Acoustic and Social Dialect Analysis of Perceptual Variable in Listener Identification and Rating of Negro Speakers." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 022 186.

Chomsky, Noam. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: The M.I.T. Press.

The Clearlinghouse for Social Dialect Studies. (1966). Ed. "Current Social Dialect Research at American Higher Institutions, Report Number 2." Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.

コエン, M. (1956). 『世界のことば』 東京：岩波書店。

ドーザ, アルベール. (1958).『フランス言語地理学』東京：大学書林。

Dillard, J. L. (1966). "The Urban Language Study of the Center for Applied Linguistics." *The Linguistic Reporter*, Vol. 8, No.5. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.

Golden, Ruth I. "Learning Standard English by Linguistic Methods." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 018 783, n.d.

Grimshaw, Allen D. (1968). "Sociolinguistics." *Handbook of Communication*, ed. Schramm, Wilbur, *et al.* New York: Rand McNally.

Hall, Robert A. (1950). *Linguistics and Your Language*, 2nd rev. ed. of *Leave Your Language Alone!* Garden City, N.Y.: Doubleday.

Hannerz, Ulf. (1969). *Soulside: Inquiries into Ghetto Culture and Community*. New York: Columbia University Press.

Haugen, Einar. (1969). *The Norwegian Language in America: A Study in Bilingual Behavior*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press.

Herskovits, Frances S. (1966). Ed. *The New World Negro*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press.

Herskovits, Melville J. (1928). *The American Negro: A Study in Racial Crossing.* Bloomington, Indiana: Indiana University Press.

_____. (1941). *The Myth of the Negro Past.* Boston: Beacon Press.

Houston, Susan H. (1968). "A Sociolinguistic Consideration of the Black English of Children in Northern Florida." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 026 627.

Hymes, Dell. (1964). Ed. *Language in Culture and Society.* New York: Harper and Row.

Kurath, Hans. (1949). *A Word Geography of the Eastern United States.* Ann Arbor: University of Michigan Press.

Kurath, Hans, *et al.* (1939). *Handbook of Linguistic Geography of New England.* Providence, R. I., Brown University.

Labov, William. (1964). "Stages in the Acquisition of Standard English." *Social Dialects and Language Learning*, ed. Roger W. Shuy. Champaign, Ill. : National Council of Teachers of English; repr. Allen and Underwood (1971), pp. 473-499.

_____. (1969). " A Study of Non-Standard English." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 024 053.

Labov, William, and Paul Cohen. (1967a). "Some Suggestions for Teaching Standard English to Speakers of Non-Standard Dialects." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 016 948.

_____. (1967b). "Systematic Relation of Standard and Non-Standard Rules in the Grammars of Negro Speakers." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 016 946.

Labov, William, *et al.* (1968). "A Study of the Non-Standard English of Negro and Puerto Rican Speakers in New York City, Cooperative Research Project Number 3288." Washington, D. C.: U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 028 423 and ED 028 242.

Loflin, Marvin D. (1966). "A Note on the Deep Structure of Nonstandard English in Washington, D. C." U.S. Deparment of Health, Education & Welfare, Office of Education Document Number ED 010 875.

_____. (1971). "On the Structure of the Verb in a Dialect of American Negro English." Allen and Underwood (1971), pp. 428-443.

Long, Richard A. (1969). "The Uncle Remus Dialect: A Preliminary Linguistic View." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 028 416.

McDavid, Raven I., and William M. Austin.(1966). "Communication Barriers to the Culturally Deprived." Cooperative Research Project Number 2107. U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document 010 876.

Mencken, H. L. (1936). *The American Language: An Inquiry into the Development of English in the United States*, 4th rev. ed. New York: Alfred A. Knopf, Inc.

Pederson, Lee A. (1964). "The Pronunciation of English in Chicago: Consonants and Vowels." University of Chicago Dissertation, as reviewed in Broz.

_____. (1971). "Some Structural Differences in the Speech of Chicago Negroes." Allen and Underwood (1971), pp. 401-420.

柴田武 (1969). 『言語地理学の方法』 東京：筑摩書房。

Shuy, Roger W. (1967a). "Detroit Dialect Study." Washington, D. C.: Clearinghouse for Social Dialect Studies, Center for Applied Linguistics.

_____. (1967b). "Linguistic Correlates of Social Stratification in Detroit Speech, Final Report." Cooperative Research Project Number 6-1347. East Lansing, Mich.: Michigan State University.

_____. (1968). "A Study of Social Dialects in Detroit." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Project Number 6-1347.

_____. (1969). "Sex as a Factor in Sociolinguistic Research." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 027 522.

Spencer, John. (1971). Ed. *The English Language in West Africa.* London: Longman.

Stewart, William. (1967). "Sociolinguistic Factors in the History of American Negro Dialects." Allen and Underwood (1971), pp. 444-453.

_____. (1968). "Continuity and Change in American Negro Dialects." Allen and Underwood (1971), pp. 454-467.

_____ . (1969). "On the Use of Negro Dialect in the Teaching of Reading." Baratz and Shuy (1969), pp. 156-219.

Taylor, Douglas. (1961). "New Languages for Old in the West Indies." *Comparative Studies in Social History*, III. 3, pp. 277-288.

Turner, Lorenzo D. (1949). *Africanisms in the Gullah Dialect.* Chicago: University of Chicago Press.

Walker, Ursula Genug. (1968). "Structural Features of Negro English in Natchitoches Parish." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 022 184.

Williamson, Juanita V. (1968). "The Speech of Negro High School Students in Memphis, Tennessee." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document EC 021 210.

Wolfram, Walter A. (1969a). "A Sociolinguistic Description of the Speech of Detroit Negroes." Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.

_____. (1969b). "Sociolinguistic Implications for Educational Sequencing." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 029 281.

Wolfram, Walter A., and Ralph W. Fasold. (1968). "A Black English Translation of John 3: 1-21: with Grammatical Annotations." U.S. Department of Health, Education & Welfare, Office of Education Document ED 025 741.

_____. (1969). "Toward Reading Materials of Black English." Baratz and Shuy (1969), pp. 138-155.

(同志社大学経済学部助教授)